

揚子江上舟艇部隊従軍記

岡山県 近藤 利勝

支那事変勃発の翌年、昭和十三（一九三八）年四月頃から、岡山県上道郡の十二か町村において、戦死者が続出し、各村の部落において、村落ごとに慰霊祭が施行されていきました。自分は当時、青年団長として毎日のようにこれらの慰霊祭に参列し、まさに東奔西走の状況でありました。

ついに、わが親戚の中にも戦死者二人がでて、自分も発憤、やがて兵隊に行くのだからという覚悟でありました。当時は、このような世情でありましたから、宇品運輸部より「海技者募集」の話があり、役場等に張り紙してありました。私は、やがては兵隊に行くのだからという覚悟もあり、親も承知してくれたので、これに応募し合格しました。

そして、慌しくも二日後に同運輸部に入隊致しまし

た。部隊編成時に「毛筆に自信ある者は前へ出ろ」ということで四人の者が出たのですが、自分もその中の一人でありました。仕事は「五カ条の御誓文」を習字し、各兵舎ごとに貼ることで、終了後、敵島神社東島上の鳥羽別荘に約二〇〇人が集結、海技教練並びに戦闘教練が行われました。

十日後、輸送船で内地を出発したのですが、本船には我々約一〇〇人、ほかに兵二〇〇人、看護婦二〇〇人、軍属一〇〇人が乗船、中国へ渡りました。残り一〇〇人は次期の渡中の部に残されました。

自分は次期の渡中の部となり、寺井一郎中隊長並びに太田軍曹と共に三人が一緒に行くことになったが、「二、三日待て」といわれたので、「なぜですか」と尋ねると、三人は教練後に毎日剣道時間が与えられ修業、習練する二段級の三人でした。

その後、自分たちは「興安丸」一二、〇〇〇トンの貨物船に乗船しました。玄海灘および東シナ海の大波に悩まされましたが、その中を進み、兵隊・軍属・看

護婦など追加した人たちも入れ、総勢一、五〇〇人が、上海に上陸したのであります。二日後、再び乗船して揚子江を遡上し、南京碇泊司令部に上陸し、以後毎日戦闘教練に明け暮れました。

その後、自分は機帆船（二〇〇トン）に乗船し、さらに五日間、揚子江（長江）を遡上しました。夜間は航行が中止で、結果的には十日後に、私は元気であったし、声も大きいというので、司令部勤務労務課に着任、勤務したのであります。

部屋には中隊長の机があり、二人の使用人がおりました。しかし、十日後には財務課勤務に変更となり、分隊長助手として勤務しました。そして、機帆船、漁船、陸工班三人の分隊長の助手として半年勤務、以降、教練分隊長、青年班分隊長並びに第三小隊第四分隊長などを拝命しました。後に、司令部勤務は遂に将校当番長並びに下士官当番長が不在となったためであります。

しかし、このような事務的な内務勤務だけではなく

なりました。江西省の揚子江沿岸の彭沢で掃討戦に参加しました。本来の任務は、軍属であるが、実際の任務や行動は兵隊と同じでした。

また、船舶部隊は、単に人や兵器・資材・食料その他の物資を運搬するだけでなく、当然、作戦・討伐等においても、兵員輸送という重大な任務があります。これなくしては作戦の遂行も、作戦の任務も果たすことはできないのであります。

彭沢（江西省の揚子江沿岸）での掃討作戦の折は、部隊を乗せての参加ですが、軍属といえども兵隊と同じで、兵員を目的の地まで輸送、上陸させるのですから、渡河作戦中は兵隊以上の危険を冒しての任務であります。

敵が対岸から射撃をってきます。船舶を操縦する我々を狙い撃ちです。ですから、無防備の我々の危険は兵隊以上であります。安慶作戦の時は、兵隊が六、七人戦死、戦傷しました。

その後、庶務課勤務となりました。庶務課長は藤本

孝機副官で、自分は三井一治司令官（大佐）の当番を拝命し、官舎より十四キロの行程を毎日自動車に同乗しました。次期の交替した司令官は、柳屋良輔大佐で金鶏勲章保持者という歴戦の勇者でありました。

その後、浦口対岸の駅の倉庫器材係長を拝命しました。これは、上海碇艦部閣下の視察に備えるための辞令であることを知り、責任の重さを感じていたのです。そのために、毎日、船具類一二〇種の在庫や器具名を覚えることに十日間は眼の回るような忙しい日々でありました。

閣下来場には、兵二十人、軍属二十人、苦力二十人がお迎えするのです。しかし、荒波のため船着場の棧橋は五〇メートル、幅二メートルの板張りで、閣下だけ一人での上陸は不能のため、司令官に「どうぞ」と手を出し、私の手を握られて上陸されました。続いて倉庫の視察にも、私の先導であるので「頼むぞ」と声をかけられ、倉庫に入られました。そして、本船の用具などを説明、さらに機帆船、次に漁船の二〇トン級まで説明申しました。「近藤とやら、よく覚えた。ご

苦勞であったな」のお言葉を頂きました。その間約一時間四〇分で説明が終了し、本部へ渡江されました。担当者としては、緊張の連続で、この時間の長く感じたことを今も忘れません。

その後、支那派遣軍総司令官・畑元帥の傘下の東久爾宮殿下が、わが部隊に来られ、その説明に私が命ぜられました。天皇陛下の第一皇女照宮成子内親王殿下の御成婚に当たり説明を拝命するという光栄に浴したのであります。そのため、私は身命の限りを尽くすことでご奉公し、九日間にわたり使命を果たしたのであり、金一封を下賜されたことは、いまだに忘れることのできない感激でありました。

昭和十九年六月、私は、脱腸のため入院しましたが、退院後、中隊長の影山中尉が対空監視隊長になられ、私が副隊長を命ぜられ、桂林（広西省、昭和十九年十一月、湘桂作戦で日本軍が占領した）より、飛行機三機で出発しました。

中隊長は「何時間で南京に到着か」と尋ねるのに対

して「約二時間でありませう」と答えました。ところが、二時間過ぎたころ上空にピカッと光る物体が見える。大型爆撃機であります。敵機は襲撃時にはエンジンを止めて滑走し、五、六〇〇メートルの高度を保って、エンジン始動と同時に爆弾を投下する。爆撃機も戦闘機も、いずれも同じようであります。しかし、爆撃機は五〇キロ、戦闘機（ロッキードP38）は三〇キロ爆弾を投下します。

この爆撃により、我が軍部隊の近くの施設・建物は縦横に爆撃され、そのすさまじさは揚子江の沿岸や沖に魚群の浮上をみることとなりました。しかし、その魚を食べると蕁麻疹じんましんになるから食べられないということとであります（しかし、それらの魚を市場が安く買い上げるといふ話もあった）。

南京対岸の浦口側の本船荷揚場では、砂糖約三、〇〇〇トンに爆弾が落下し、三昼夜燃え続けたということとあります。また、中国人男女が二十数人、爆風や爆弾のため被害を受け、血管は破れ、肉片は飛び、実

に見るに耐えぬような惨状を呈していました。時には、眼を剥き出し、意識もなくキョロキョロしていたり、罪なき小児の姿などあり、涙なくしては語ることもできぬ有様であったのです。

我々船舶隊や碇泊司令部の小・中隊は食事もできず、死に行く子供達を見て涙なしでは語れず、後片付けに三日間の奉仕をいたしました。敵も味方もない、戦いは人類の敵であると、つくづく感じた次第でありました。

その後、私は第二陸軍病院より、傷痍軍人の曹長以下二〇人を宰領、引率して北京經由で帰国することになりました。当日は厳寒の最中で途中駅にて二回ほど下車、兵站泊まりなどして、十二月十日、満州、朝鮮を経て、無事釜山に到着しました。

日曜日に乗船しましたが、途中で敵機（グラマン戦闘機）の来襲に遭い、対馬海峡などで船首回転などをして、これを回避し、無事門司港に到着しました。しかし、門司は雲のため下関にと変更となり、逆コース

で靴に荒縄を巻き下船しました。

駅では女子生徒の湯茶などの接待があり、希望者に飲むことを許可しました。そこで十六人は宇品へ、翌日司令部へ出頭しました。人事課長は高橋陸軍大佐殿で、全員控え室にて訓辞を受けました。帰途、大佐殿は「近藤、大儀であった。業務報告は分かった。お前は田村閣下より一カ年の休暇利用にてとなっている。また、南京司令部柳原大佐と共にとあるが、十カ月足止めするぞ」とのことであった。

「本日付けをもって、陸軍軍属・近藤利勝を准尉待遇に命ずる。良いか」とのことでありました。そして、次期南支香港勤務を拜命となり、昭和十九年十二月十四日、東岡山駅に到着しました。

各中隊の兵二、八〇〇人の中に運輸部軍属二〇〇人は、ほとんど日本の西から東、南北の各地より集合した混成部隊であります。そして、すべて戦闘訓練、陸海技ともに厳しい限りの任務を遂行し、本科以外の教練を实行しました。

また、自分は「智・仁・勇」を日々の心の糧として奉公一途の精神で任務を尽くすことが本分であるとして励んだ結果であると信じております。そして各将校たちの信頼の的となったものと考えております。

私の略歴は次の如くであります。

昭和十五年二月二日 召集

三月五日 広島県宇品陸軍運輸部

司令部舟艇訓練

五月二十五日 上海碇泊場司令部（碇監部）

暁第二九四七部隊

六月一日 南京碇泊場司令部配属水工勤務

暁第二九四七部隊

昭和十六年

一月五日 司令部勞務課勤務

七月一日 司令部統勤務命令 財務課

昭和十七年

一月二十日 軍属中隊第三小队第四隊長

命令さる、将校当番

十月十五日

器材課係拜命

十一月二十日

司令部庶務課勤務

第三小隊第四分隊長司令部取締役分隊長

未成年班分隊長司令部取締役分隊長

未成年班分隊長 教練分隊長

作業班分隊長

拜命

昭和十九年

八月一日

上海建監部より一カ年休暇

一時帰還命令

十二月八日

海軍状況悪化のため北支經由にて

傷痍軍人一二〇人引率宇品帰還

次期南支香港勤務拜命受領

【解説】

聞き取り対象者の略歴を見ただけでは、主として碇泊場司令部勤務であるから、戦地での戦闘にあまり関係ないように思われるであります。中国の大

河・揚子江の船舶行動の中核である私たちの南京碇泊場司令部は、在中米軍航空隊の攻撃的でありました。

在中米空軍は、広西省や湖南省西部に多くの航空基地を設置し、長沙・衡陽・衡山・柳州・成都などに、多数の爆撃機（B 25、B 29）、戦闘機（P 51、P 38等）を集め、上海、南京、漢口は度々被害を受けておりました。

それは、我が軍事施設のみでなく、一般の民衆（中国国民）も被害を受け、都市でもその惨状は目を覆うものがありました。米軍とすれば、日本の占領地の中国国民は敵と見做していたのかも知れませんが、迷惑なのは一般の良民でした。

昭和十九年夏から、湘桂作戦が開始されて、在中米軍基地（飛行場）は次々と攻略されたのですが、その時期に私（解説者）は引率し、内地へと向かっておりましたから、現地状況を知ることではできなかったの

すが、昭和二十年八月にかけては随分激しい戦闘があったと聞きました。従って、我々船舶部隊、碇泊場も、米中空軍の重爆撃により大きな被害を毎日受けていたのです。

資料によりますと、

船舶兵団司令部 一、船舶輸送司令部 五、
船舶輸送司令部 二六、野戦輸送隊司令部 一、
船舶輸送地区隊司令部 二、船舶団司令部 七、
東京船舶隊 一、碇泊場司令部 二六、
船舶砲兵団司令部 一、
と多くの司令部が各地に位置しておったのです。我々も、その一つの司令部に勤務しておった訳であります。

その隷下、指揮下に、

各種連隊 四六、大隊 六〇、隊 一八一、
廠 四八、班 三五、その他を含め 四六八、
で陸軍船舶部隊が編成されていきました。

初年兵の初陣

―矢部伍長の戦死を悼む―

神奈川県 森 道 一

仕事に情熱を傾けている若者、学業半ばの青年、恋をささやき二人の将来を語りあっていた人たち。これらの人たちを戦争という黒い影はその絆を断ち切っていた。そして、暗い影を残して若者は戦地に征き、大陸の広野に、南海の孤島に、あるいは海の藻屑と消えた。最後に「お母さん」と叫びつつ。しかし誰もそれを語ろうとしない。

昭和十六（一九四一）年七月、私は東部第六十三部隊に召集された。今日も、甲府盆地に真夏の太陽が、ギラギラと照り付け、その下を重い重機関銃を肩に食い込ませ、額の汗を拭うこともせず、重い足取りで前進する兵の一団を指揮する長谷川少尉、ムチを片手にしている班長。軍歌は歩兵の本領『満朶の桜』、大声